

地球環境時代における教育小委員会 第5回議事録（案）

日時：平成18年 3月 29日（月） 17:10～19:40

5

場所：建築会館 B1A会議室

出席者：吉野博（東北大学）、三浦秀一（東北芸術工科大学）、菅原正則（宮城教育大学）、
伊藤牧子（伊藤牧子設計室）、小澤紀美子（東京学芸大学）、宿谷昌則（武蔵工業大学）、
10 妹尾理子（住宅総合研究財団）、高橋達（東海大学）、田中稲子（名古屋工業大学）、
土川忠浩（兵庫県立大学）、西川竜二（秋田大学）、村田昌樹（OM計画）、吉野泰子（日本大学）
：13名

資料：6-0 地球環境時代における教育小委員会（+刊行委員会）第6回 議事次第

15

6-1 地球環境時代における教育小委員会 第5回 議事録（案）/菅原委員

6-2 2005年度 小委員会活動成果報告（2006.3.27版）/吉野（博）主査

6-3 委員会活動の方向性について/菅原委員

6-4 エネルギー教育調査普及事業+日本エネルギー環境教育学会について/田中委員

6-5 エネルギー教育調査普及事業（地域拠点大学）全体計画/田中委員

20

6-6 日本エネルギー環境教育学会の概要（HPより）/田中委員

6-7- 地球のたまごにおける環境学習事例「北庄内小学校の校外学習」/村田氏

6-7- 地球のたまごパンフレット/村田氏

6-8 「環境教育用教材 学校のなかの地球」目次案/学会事務局

25

議事：

0. 初参加者の紹介

会議に先立って、村田氏と伊藤氏から自己紹介があった。

1. 議事録確認

30

前回議事録案（資料6-1）は承認された。

2. 刊行予定について

今後の予定について、4月中旬が原稿〆切（執筆依頼は郵送済み）であることが確認された。

35

目次案（資料6-8）を確認した。三浦委員の執筆予定として、1.1(2)の分担のタイトルを変更すること
および2.1小学生対象の事例について追加することになった。また、妹尾委員執筆予定の1.2のタイトル（お
よび内容）を変更することになった。地球のたまごを情報データベースに加えることになった。

3. 今年度活動成果報告

吉野（博）委員長から、標記（資料6-2）について説明があり、内容について確認された。

40

4. 地球のたまごにおける環境学習事例

村田氏から、文科省の委託により科学技術振興機構（JST）が実施する「理数大好きモデル地域事業」の補助を受けて行われた標記（資料6 - 7）について説明があった。これに関して、次のような意見交換があった。

5

（吉野（博））このような企画は頻繁に行われているか。

（村田）積極的に声掛けはしているが、来てもらうまでになかなか至らない。

全国地球温暖化防止活動推進センター（JCCCA）が実施する「主体間連携モデル推進事業」へ、静岡県地球温暖化防止活動推進センターが申請をし、地球のたまご見学ツアーを企画している程度である。

10

（小澤）OMソーラーで家を建てた世帯の子どもを通して呼びかけることはできないか。

（村田）施主の情報は工務店が管理していてOMソーラー協会が直接関わっていないので、それは難しい。またエネルギー環境教育情報センターに「エネルギー環境を学ぶ広報施設ガイド」に登録されているので、それを見て見学に来る人もいるが、PR機能がないので専ら口コミに頼っている。

15

5. 学校エコ改修事業

宿谷委員および伊藤氏から、標記のモデル校について説明があった。これに関連して次のような意見交換があった。

20

（吉野（博））活動は組織的に取り組まれたのか？

（伊藤）これまでは一部の興味ある先生だけが頑張っていたが、今回は校長先生が主導した。

ただ、テーマが身近だったので、先生方の興味をひいたのではないか。

（小澤）周りのサポートがあつてこそではないか。

（伊藤）コーディネーターやサポーターが必須だし、役割が重要。先生や学校だけでは絶対にできない。

25

（小澤）日本は教育にお金をかけるべき。現状はGDPの3%だが、これを5%にすると全然違う。

（伊藤）この事例では、サポーターの件費が潤沢に使えたので、早朝からの準備や、夜間の調査も実現することができた。ボランティアではむしろ無理。

（田中）学習プログラムを作る期間はどれくらいか？

（伊藤）1年あるが、自治体の予算計画により立ち上げが遅くなるなど事情は様々。

30

（土川）説明された事例は改修前だったが、改修後の学習プログラムの予定は？

（伊藤）学習プログラムは、改修後にも継続して行えるようなもの（校舎を利用して快適な環境をつくるなど）を検討している。

（三浦）この事例では体験型学習を提示したことが成果としてあげられるが、一方で、「環境とは何か」をとらえることが教育を進める上での問題としてあげられるのではないか？

35

（伊藤）環境とは何かの中身について、テーマを絞るようなことはしなかった。ただし、遠くの地球環境問題ではなく、身近な皮膚周りの環境を扱うようにはした。

（宿谷）小学校の先生には建築を専門とする人はいないが、環境教育に取り組むようになってから、自宅をどのように改修すべきかなど話題が当たり前になるようになったという。これこそが成果だと思う。

40

（妹尾）この事例でやられていることはこれまでと同じであるが、それを専門家の意見としてきちんと整理された形で先生自身が学べたことで、生き生き取り組めたのではないか。

（土川）地域の自治会はどのように関わっているか？

（伊藤）PTAにはサポートの要請の案内があったが、自治会は巻き込めなかった。

6．エネルギー教育調査普及事業および日本エネルギー環境教育学会について

田中委員から、標記（資料6 - 4 ~ 6 - 6）について説明があった。これに関して、次のような意見交換があった。

- 5 （田中）エネルギー環境教育学会の大会が今年9月に行われる。理科教育やエネルギー政策に関わる内容が多いと予想されるが、ライフスタイルの必要性も最近は気づいているようだ。現場の先生はエネルギーの原理などを扱うが、サポート側はサプライサイドの話が多い。
エネルギー教育調査普及事業も、資源エネルギー庁の委託を受けてエネルギー環境教育情報センターが業務を行っているので、エネルギー政策の側面が強い。
- 10 （小澤）それで環境省は距離をおいているのだろう。
（田中）現場の先生は純粋な気持ちで教育を行っているので、この機会を利用して我々もライフスタイルの重要性を主張するのが良いと思う。
（小澤）エネルギー概念をきちんと教育するのが大事。Kids' ISOのような方法ではエネルギー概念の形成にならない。
- 15 これについては学校エコ改修事業の事例ではうまくいったと思う。テーマを絞らなかつたことと、外部からは徹底的にサポートに回つたことで、先生たちも学べたのだと思う。これまでは「やらされている」意識が強かつた。
（宿谷）知人の電気工学を専門とする先生は、銅線の中の電子レベルの世界観しかなく、発電から消費までの全体を捉えていないことを知り、驚いた。今ではお互いに環境の重要性を確認したが、このような対話によりボタンの掛け違えが無いようにしていくことがこれから大事と思う。
- 20 （三浦）経済産業省が省エネルギーセンターに委託してこれまで行われてきた省エネモデル校事業も施策的であるが、中央集権的な方法なので、現場のニーズに対応しきれていないのが現状。ただ、小学校を中心に数多く実施されるので、ライフスタイル普及の取っ掛かりにはしやすい。
（小澤）意識改善を待たず、ドイツのように社会経済システムとして対応し、行動を制限する方法もある。
- 25 （宿谷）ハードな技術に対して、ソフトの技術という考え方もある。

7．委員会活動の方向性について

標記（資料6 - 3）について確認された。

30 8．委員の変更

銚井委員の辞任と、OM計画の村田昌樹氏を新委員として迎え入れることが承認された。

9．次回開催日

次回委員会は、5月29日（月）16:30～19:00 建築会館会議室で行う。

- 35 次々回ごろ、地球のたまごで委員会を開催する案が挙がつた。

以上